

「被災した障害者の声～名取市～」



NPO法人 ドリーム・ゲート 沢井直美 田中慎也

仙台市の南、名取川の河口付近に位置する宮城県名取市。東日本大震災では、沿岸部の閑上地区を中心に900人以上の死者が出るなど大きな被害を受けた地域の一つです。そんな名取市で、重度障害者を支援するNPO法人があります。ドリーム・ゲート。

震災後も積極的に障害者ケアを続けているこの団体の中心となっているのは障害のあるスタッフです。

理事長の田中慎也さん（29）

は、小学生の時のスキー事故が原因で手足に障害があります。スタッフの沢井直美さん（40）は、脳性麻痺のため電動車いすで生活を送っており、言語にも障害があります。この震災で被災した2人ですが、発災時、どのような状況に置かれていたのでしょうか。また、その後、情報をどのように収集していたのでしょうか。テレビとの付き合い方も交え話を聞きました。

2人は別々の場所で被災した

田中さんは名取市内にあるドリーム・ゲートの事務所です。通常通りの作業をしているときに、激しく長い揺れに襲われた。「ただただ、とても怖かった」と当時を振り返った田中さん。同時に事務所の電気は落ち、点けていたテレビも消えた。「地震だけだと思っていました。津波が発生しているとは思っていませんでした」。ドリーム・ゲートがあるのは名取市の中心部。津波が襲った太平洋岸から直線距離にして6.5キロほどの場所にある。そのため、「津波が押し寄せてくるとは夢にも思っていなかった」と田中さん。直接、津波が押し寄せることはなかったものの、事務所のすぐ側を流れる川は逆流し、水位は上昇していた。「私は見ていないのですが、車が流れてきたと聞いています。いま思えば、危なかった」。

ドリーム・ゲートの利用者は重度な障害があり、自宅で動けない人もいます。電話も通じなかったことから、スタッフは安否確認をするため、自転車です市内を回った。「身内の方や知り合いの方で不幸に遭われた方もいましたが、夕方18時くらいには、幸いにも利用者スタッフ全員が無事だったことが確認できました」。

一方、沢井さんは仙台駅のプラットフォームにいた。「どうして良いか分からず、怖かった」という沢井さん。沢井さんは電動車いすに乗っているため、一人で逃げるといってはなかなか難しい。加えて、仙台駅の構造上、駅の外に出るにはエレベーターを使わなければならない。しかし、外に出ようとしたときにはすでに、エレベーターは止まっ

ていた。電動車いすはバッテリーも含めるとおよそ100キロある。安全に運ぶためには最低でも6人の力が必要だった。沢井さんをプラットフォームから待避させた駅員が救援を求めたが人手が集まらない。結局、駅から出るのに2時間ほどを要した。「エレベーターもじきに動くだろうと思っていました。でも、動かない。人を呼んでも地震の対応に追われていて、つかまらない。大変でした」。

その後、スタッフと合流し車で名取へ向かった沢井さん。本来なら、30分程度で帰れる道のりが4時間かかった。その時、流れてくるラジオの情報に耳を疑った。「正直、地震だけだと思っていました。ここまで被害が大きくなっているとは…。津波も信じられなかった。すごく怖かった」。ただ、状況に聞き入るしかなかった。

さらに車中で沢井さんは困っていた。それはトイレ。沢井さんはドリーム・ゲートの活動で名取市の車いす対応トイレマップを作っており、名取市にある車いす対応トイレは熟知している。とはいえ、仙台市から名取市への道すがらの情報までは詳細には確認していなかった。しかも、地震の影響で使えるかどうか分からない。結局、地震発生からドリーム・ゲートに到着するまで6時間余り。「きつかったけど、耐えるしかなかった」。

重度障害者の避難所として

重度障害者が体育館などの避難施設で健常者と同様に避難生活を送ることは難しい。たとえば、トイレが使えないために、飲料水すら我慢し体調を崩すこともある。そこで、バリアフリ

ーである事務所を福祉避難所として開放することにした。

「本来なら、車でアテンダント（ヘルパー）が利用者を回っていたのですが、ガスも電気も使えないようでは、生活できる状況ではありません。電動車いすも電源がなければ

バッテリー充電すらできず、いざというときに動けない。それならば、みんなを一か所に集めてケアする方が良いと判断したんです（田中）」。ドリーム・ゲートは去年6月、災害

時に対応できるようモデルルームを開設したこともあり、介護用ベッドや毛布や枕、非常用の食料などを備えていた。発電機や燃料もあった。福祉避難所としての設備は整っていた。そのため、多いときには15〜6人が寝泊まりをすることとなった。沢井さんもそこに合流した。しかし、なぜ、このような準備ができたのだろうか。「中越地震が起きたときにボランティア体験をしていたスタッフが何人かいたんです。そこで、知識が蓄えられていたのは大きかったですね（田中）」。

NHKでは防災、あるいは発災後にどのような危機を乗り切るかという放送をしてきた。そういった情報は今回、役に立ったのか聞いてみた。すると、田中さんはしばらく考えてから、こう応えた。「そういう番組はよく見ていました。NHKスペースナルもE TV特集もクローズアップ現代も。その時はフムフムという感じで見ていても、でも、実際にそれを直結させては



改修中のドリーム・ゲートのある建物

いませんでしたね。テレビからはなかなかリアルに実感できていなかったんですよね」。

震災報道から感じたこと

発電機があったため、途切れ途切れではあったがテレビから情報を手に入れることはできた。しかし、入ってくるのは俯瞰した情報しかなかった。「最大多数の最大公約数をとって必要な情報を出しているのは分かるが、この時点の暮らしをどうするのかというところで切羽詰まっていた。全国放送は致し方ないとしてもローカル放送でインフラ整備など暮らしに直結するような情報が欲しかった(田中)」。原発報道に多くの時間が割かれていたことにも不満が募った。「福島原発のことを報道されても、意味が分からなかった(沢井)」。



細かい情報を欲していた理由の一つには、田中さんたちの事務所まで情報が回らなかったことがある。指定避難所では行政から様々な情報が入ってくるが、田中さんたちの事務所はそこから抜け落ちていた。「炊き出しなどの細かい情報は、スタッフが自転車で避難所を回って集めるしかなかった。コミュニケーションFM?そんなものはありませんでした」。名取の災害FMが開局したのは4月10日。行

政も混乱しているなか、スタッフの力に頼らざるを得なかった。

また、避難所の様子がニュースや中継で映し出されるたびに、田中さんと沢井さんはある疑問を持ったという。「障害者が誰も映されていないんですよね、だれも。全国放送ではなくローカル放送の時には映っていない。彼らがどんな生活をしているのか。そういった情報も欲しかった(沢井)」。これに続けて田中さんは、「障害者も本来は避難所で問題なく過ごせれば良いのですが、現状ではそれは難しいわけです。結局、別々に過ごすしかないわけですが、そうなってしまつと、垣根ができてしまうと思うんですよね。本来は一緒に被災者なんですけど…。だからこそ、少しでも良いから、一緒だと感じてもらうためにも、そういった避難をされている障害者がいたのであれば映して欲しかった」と語った。

テレビはなくてはならない必需品

多くの障害者はテレビからの情報を頼りにしている。たとえば、視覚障害者もいまやラジオよりもテレビを重視しており、地震が起きたときには情報源たるテレビをまず押さえるという人もいるほどだ。また、身体障害者は体が動かせない分、テレビは情報源であり、最大の娯楽なのだ。さらに言えば、そのテレビを制限される施設生活を体験したことがあるとテレビに飢える。その反動で施設から出るとテレビにドップリつかる人も少なくない。

2歳の時から16年間、施設で暮らした経験を持つ沢井さんもその一人だ。「施設では時間が決められていたから、好きな番組を見ることができなかった。いまは、一人暮らしなので好きな

時間帯に好きな番組を見ることが出来る」。そんな沢井さんにとってテレビは大切な娯楽だ。「ドラマとアニメが中心。サザエさんだけはいまも昔も欠かせない」。そんな沢井さんの部屋にはお気に入りのアイドルのポスターが飾られている。当然、彼の出る番組は必ずチェックしている。

また、田中さんもテレビは「一番身近な情報源」とその必要性を重視している。どんなテレビ番組を見えますかとの問いには、「小さい頃からドキュメントが大好きで、そういう番組を見ることが多い。でも、最近はアニメ、ドラマ、バラエティー、ニュースと見るジャンルが増えている。大人になるにつれて、自分の中の視野が広がってきている証拠だと思っている」と答えてくれた。そこで、震災を経てテレビとの接し方は変わったかと聞くと、田中さんはこう答えた。「地震のニュースは一時期、見なくなりました。怖かったから。だけど、やっぱりそういうドキュメントは見ています。ワンピースなんか面白くてはまっていますが、でも、津波のNHKスペシャルや原発のETV特集も見るようにしています。忘れちゃいけないことだと思いますから。ただ、前よりは少しですが、報道に対して本当かな？という風に見ているような気がします。信じていないわけではありません。でも、沿岸部に行って瓦礫の山を見たりしたからかも知れませんし、地震を実際に体感したからかも知れませんが、テレビを通して伝えられていたことにギャップを感じなかったわけではありませんから」。

報告 中央組織部長 竹内哲哉